野火とレイテ島の看護師

2016年度2次隊　フィリピン レイテ島パロ市　看護師
橋本 温美（草加市）

皆さんは「野火」という物語をご存知でしょうか？昭和29年4月、新潮文庫(当時の創元社)により発刊された小説で、作者である大岡昇平がレイテ島で体験した第2次世界大戦様子を基に描かれました。昭和34年には市川崑、平成27年に塚本晋也がそれぞれ映画化しています。ストーリーはレイテ島西海岸が舞台であり、今回私はこの西海岸に所在する一つの慰霊碑を紹介しようと思います。

※地図を用意して私の文章を読み進めてください。

レイテ島西の中核オルモック

結核により戦力外と見なされた主人公の田村一等兵(小泉兵団独立歩兵第十四連隊村山隊)は、中隊がおかれていた場所(恐らくバイバイ周辺)から一人４０キロ北上し、オルモック方面に向かって彷徨います。第26師団独立歩兵第12連隊(今堀部隊)の第3大隊(立石大隊)の約250名がこのオルモックでの主力部隊であり、米軍との攻防戦は昭和19年12月に開始されました。

彼らはオルモック街道西側の道路沿いにある元国会議員の Dominador M. tan の邸宅“コンクリートハウス”に立て籠もり抵抗しました。当時この建物をめぐっての攻防戦はオルモック最大の激戦だったと言われ、周囲200m 四方には５m 間隔で無数の散兵壕があったそうです。ここに立て籠もった立石大隊は、昭和19年12月14日に全滅したと言われております。

現在この建物はある会社の工場敷地の中に存在しております。崩壊した壁には銃弾痕や穴が多数残っており、一部その穴の中には弾丸が確認できます。

あれ？この現地語…何語？

主人公の田村が途中で現地人男性に出会い、カモテ(芋)をふるまわれるシーンがあります。レイテ島西部ではビサヤ語が現地語として使われており、小説でもそう描かれています。

しかし、昭和34年に市川崑が制作した Fires on the Plain(野火)を視聴していた際に、私はこのシーンの二人の会話に違和感を持ち、フィリピン人の友達にも視てもらうことに…。すると映画ではタガログ語(フィリピンの共通語)が話されていたことが判明しました。

こんな小説との違いに注目しながら、皆さんもぜひ映画を視聴してみてください。